書式７

| 助成番号 | ２１－A13 |
|---|---|

# 成 果 報 告 書

記入日　2023 年　9 月　30 日

| フリガナ（ニイヤ　カズキ）<br>氏　名 新谷和輝 | 渡航先国名・地域<br>チリ | 所属機関<br>チリ大学 |
|---|---|---|

研究テーマ：
チリにおける映画運動の系譜とアクチュアリティ

研究期間　：　2022 年 9 月 ～　2023 年 8 月　（1 年　　ヶ月）

研究成果（概要）

本研究の目的は、チリにおける映画運動について明らかにすることであった。現地でのアーカイブ調査やインタビューによって、1960 年代から現在に至るチリの映画アクティヴィズムの系譜を浮き上がらせることができた。

研究成果（詳細）

本研究は 1960～1970 年代のラテンアメリカ映画運動で中心的な役割を果たしたチリにおける映画運動の伝統とその変遷を解明することを目的とした。キューバ革命を機に加熱したラテンアメリカでの革命映画運動のなかでチリは革新的な作品を発表し、各国の映画人が議論を交わす集会を主催するなど活発な働きを見せた。しかし 1973 年に軍事クーデターが起こると、独裁政権下のチリで映画製作は著しく困難となった。これまでのチリ映画研究およびラテンアメリカ映画研究では、この時期を運動の衰退期と捉えていたために、その後厳しい社会条件のもとで継続された映画運動についての調査が進んでいない。またチリ独自の映画運動のあり方についても明らかにされてこなかった。

こうした問題意識のもとで、報告者は 1960 年代から現代にいたるまでにチリの映画人が実践してきた社会と密接した映画にまつわる活動を具体的に調べると同時に、各時代の映画運動の接点や切断点、理論の移り変わりを考察することを目指した。そのために以下の５つの調査項目を設定して、1 年間のチリ現地調査で同時並行的に各項目の資料収集と研究内容の精査を行っていった。

(A)社会主義政権下における多様なアクターによる映画運動

(B)1980 年代に開催されたビデオ・アート展とその周辺

(C)1980 年代～2010 年代に行われた子供向けの映画教室

(D)2000 年代以降の貧困地区での映画制作ワークショップおよび映画祭

(E) 1973 年以降のチリにおける記憶を巡る国内外の映画運動

これらの調査項目は、現地で指導教員イグナシオ・アグエロの助言を受け、映画関係者へのインタビューを実施する過程で浮かび上がってきたものである。以下では、それぞれの項目に沿って、報告者がチリで得られた成果を記していく。

(A)社会主義政権下における多様なアクターによる映画運動

報告者が在籍していたチリ大学映像コミュニケーション学部には、1970 年前後のアジェンデ社会主義

政権下での映画運動に携わっていた映画監督が教鞭をとっており、彼らに当時の活動についてインタビューを行った。また、同大学にある映画アーカイブが所蔵している映像資料や映画雑誌を調査した。その結果、左派イデオロギーによる政治的結束が強まり、キューバやアルゼンチンといった先駆的な革命映画に影響を受けていた当時のチリにおいて、主流の映画運動を相対化し、映画と社会の関係を問い直そうとしていたチリの映画人について知ることができた。特に、報告者が数回にわたってインタビューを行ったカルロス・フローレスは、チリ映画運動の中核を担っていた人物でありながら社会を批判的に眺めるための映画の役割について意識的であり、当時の映画運動について見直すきっかけを与えてくれた。

さらに、フローレスから紹介されたチリの映画人ラウル・ルイスの思想や作品に触れられたことは本研究を進めるにあたって非常に有益であった。ルイスは、運動が特定の映画のスタイルや政治イデオロギーを固定して観客に押し付けることに抗い、映画によって民衆と共に社会を批判的に考察する「抵抗の文化」としての映画運動の必要性を訴えていた。彼の視点から映画運動を捉え直すことで、チリの映画運動の独自性を掴むことができた。ルイスについては、ビニャ・デル・マルにあるルイス・サルミエントアーカイブを訪問し、彼がチリ時代に残した貴重な映画資料や文献を調べることで、彼の映画や社会に対する根本的な姿勢をより詳しく知ることができた。結果として、彼が体現していた「抵抗の文化」は本研究全体を貫く重要なテーマとなった。

(B)1980 年代に開催されたビデオ・アート展とその周辺

独裁政権下の 1980 年代のチリでは公に映画を撮ることは非常に困難であったが、その代わりにビデオによる記録活動が盛んになった。また、そうしたビデオによるドキュメンタリー映像が増えると同時に、ビデオアートを制作する映画作家やアーティストも現れた。報告者はチリに到着した直後にチリ国立現代美術センターで開催されていた 1980 年代のビデオアート祭の展覧会に参加することで、それまで知らなかったビデオアートと映画の接点について調べる必要があると判断した。上記のフローレスにインタビューを行うと、彼もこのビデオアート活動の中心にいたことがわかり、彼の作品や活動を起点にして 1980 年代のビデオアート作品を鑑賞し、分析を進めた。これらのビデオアート作品は一般的にはほとんど流通しておらず研究もまだあまり進んでいなかったため、鑑賞すること自体が困難な作品ばかりであったが、チリ国立現代美術センター、チリ現代美術館、チリ美術館といった複数の所蔵機関の協力を得ることで代表的な作品や作家のリストアップを進めることができた。

結果として、フアン・フォルシュやグロリア・カミルアガ、タチアナ・ガビオラといったビデオアーティストを知ることができ、彼らが作品を発表していたチリ・フランスビデオアート祭の周辺で独裁政権下のチリの実情を記録しようとした映画作家と、ビデオ・アート独自の芸術性を守ろうとしたアーティストらの間で論争があったことがわかった。彼らの作品分と当時のカタログやインタビュー資料を今後検討することで、新しい映像媒体としてのビデオの登場によってそれまでの映画運動のあり方がどのように見直されたかを考察していきたい。

(C)1980 年代～2010 年代に行われた子供向けの映画教室

この調査項目は、現地調査において最も成果があがったものである。現地に行く前から報告者はチリで長年継続されてきたアリシア・ベガの映画教室について調査したいと考えていたが、サンティアゴで開催された上映会でこのアリシア・ベガの映画教室を継承しようとする関係者と偶然知り合うことがで

きた。彼らは「アリシア・ベガ財団」という文化財団を運営しており、ベガが培ってきた映画教室の方法をチリ各地の教師に向けてレクチャーするワークショップを開いていた。報告者はこのワークショップに応募して選考に通ったため、チリ北部の町アリカで開催されたワークショップに参加することができた。この地域の教師たちと一緒にアリシア・ベガのメソッドを実際に手を動かしながら学ぶことで、この映画教室がなによりも子供たちに映画の楽しさについて体験してもらうことを目指していること、貧しい状況にある子供たちが無料で参加できるために予算のかからない工夫を施していること、そして芸術によって社会問題と向き合おうとするアート・アクティヴィズムの姿勢がこの活動に鮮明に表れていることを知った。

その後も財団の関係者とは連絡を取り合い、アリシア・ベガがこれまで行ってきた30回以上の映画教室での子供たちの作品など、過去の教室のアーカイブを調べる機会に恵まれた。報告者は5回分の資料を精査し、作品の写真を保存している。今後これらの資料の分析を進め、ベガの教室の芸術的かつ社会的意義について明らかにしていきたい。

(D)2000年代以降の貧困地区での映画制作ワークショップおよび映画祭

共同監督として活動しているホセ・ルイス・セプルベダとカロリナ・アドリアソラにインタビューを行い、彼らの活動が1960年代の映画運動の影響を受けながら、現代の小型カメラやネット環境を駆使しながら独自の運動を展開しようとしていることがわかった。

さらに、彼らがサンティアゴで主宰している市民向けの映画制作ワークショップと同地区での映画祭に参加し、ワークショップで市民が作り上げたサンティアゴのアクチュアルでローカルな体験についてのドキュメンタリー作品や、それを発表して議論する場の様子を観察した。詩の朗読や他国の映画アクティヴィストを招いての報告会も含むこの映画祭はきわめてユニークであった。セプルベダ＆アドリアソラの活動について、現在のチリ映画の作り手のなかで最もインディペンデントで社会的な性格を持っていることも、映画研究者による研究発表に参加して確認することができた。今後はそういった先行研究を参照しつつ、映画制作と上映活動を一体化させている彼らの取り組みについて理論化とその現代性の解明を進めていきたい。

(E) 1973年以降のチリにおける記憶を巡る国内外の映画運動

指導教員イグナシオ・アグエロは1970年代からチリに残って作品を発表し続けているが、近年の作品は彼の個人的な回想からチリの集合的記憶が描き出される実験的な作風である。彼の自宅で数回のインタビューを行い、近年のチリ映画で増加している主観的な記憶をテーマとするドキュメンタリー映画の潮流における彼の特異な点について詳細に明らかにすることができた。また、アグエロの作品をパトリシオ・グスマンの作品と対比させることで、ドキュメンタリー映画における声と記憶の表象についての論文を執筆し日本の学会誌に投稿した。

以上のように、現地調査での最大の収穫は、博士論文執筆に向けて大まかな論文の構成を決めることができた点にある。また留学中にも（C）や（D）の項目で得られた調査結果を日本の学会でオンラインで発表することができた。今後は今回の滞在で得られた資料や情報を整理し、考察し、ひとつの論文にまとめていくことが目標となる。

留学中の生活・研究でのトピックス

報告者はチリ大学があるサンティアゴに住んでいたが、チリ各地の映画祭やワークショップ、アルゼンチンのドキュメンタリー映画祭にも参加するなど、なるべく現地の映画文化に触れられるように動きまわった。チリは地域によって風景や文化ががらりと変わるため、行く先々で新鮮な出会いがあった。

バルディビア映画祭の様子

アリカでの映画教室ワークショップ

報告者にとって一番のよろこびは、現地でたくさんの映画関係者と知り合うことができたことだ。とくに指導教員のイグナシオ・アグエロは彼の知り合いを大勢紹介してくれ、彼らとの親交は研究のためだけでなく、不慣れなチリで生活を送るにあたって大きな助けとなった。

映画教育の第一人者アリシア・ベガとイグナシオ・アグエロ

今後の社会貢献

当面の目標は今回得られた成果をもとにした博士論文を執筆することであるが、それだけでなく、より一般の人にも届く形で自分の研究を発信していきたい。

たとえば、映画教育について現地で今まさに精力的な活動を行っている人々と出会えた経験を生かしたい。彼らにチリだけでなく日本でも映画教室のワークショップを開くことを提案してみると、喜んで賛成してくれた。予算やスケジュールなど課題はあるものの、日本ではあまり知られていないアリシア・ベガのメソッドを紹介するために、財団のメンバーによる特別ワークショップの開催にむけて報告者は少しずつ動き出している。

また、今回知り合った映画作家の作品やビデオアート作品の紹介も行いたい。現状、日本でチリ映画を見られる機会は非常に限られている。イグナシオ・アグエロの作品だけでなく、映画アクティヴィズムの最先端を実践しているセプルベダ＆アドリアソラや、近年海外での研究が盛んなチリのフェミニズム映画作品に字幕をつけて上映会を開けば、大きな反響があると考えている。